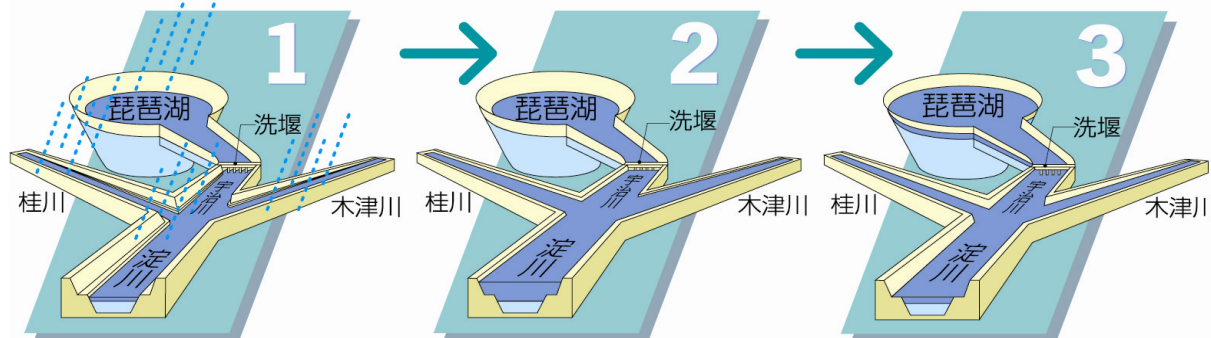
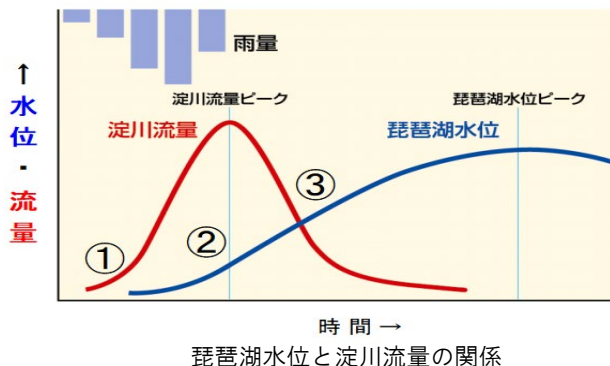


瀬田川洗堰と琵琶湖の水位管理等における取り組み

琵琶湖・淀川の治水システム

- ・淀川水系の河川は、木津川・桂川等の流量が先に増大し、続いて淀川本川がピークを迎え、その後一定の時間差をもって琵琶湖水位がピークを迎えるという特性があります。
- ・この特性を活かし、下流部が危険な時は、下流の洪水防御のために瀬田川洗堰の放流制限もしくは全閉操作を行います。
- ・下流部の洪水がピークを過ぎた後、上昇した琵琶湖水位を速やかに低下させるために瀬田川洗堰を全開して琵琶湖からの後期放流を行います。



①大雨で淀川の水位が上昇し始めますが、琵琶湖の水位はゆっくり上昇していきます。

②淀川の流量がピークになっても、琵琶湖の水位はさほど上昇していないので、洗堰からの放流を制限します。

③淀川の流量が減り始めるとき、琵琶湖の水位を下げるため、洗堰を全開します。(後期放流)

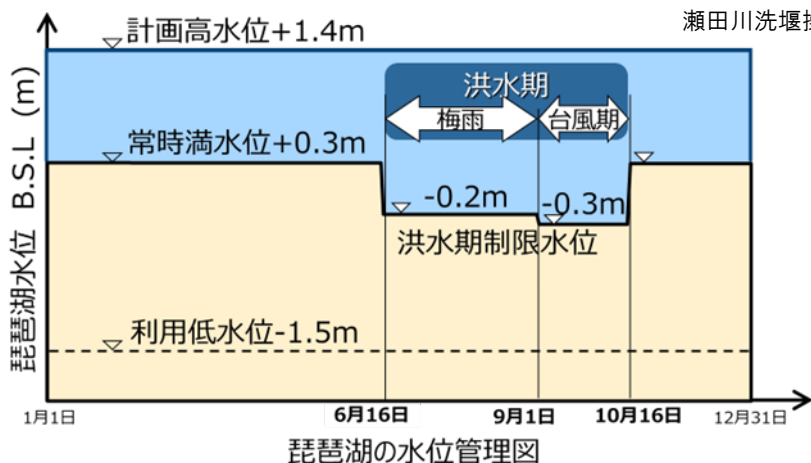
洪水時の琵琶湖からの放流イメージ

琵琶湖の洗堰放流量管理

- ・瀬田川洗堰で放流量を調節することにより、琵琶湖周辺の洪水防御、淀川の洪水流量の低減、琵琶湖の水位維持、淀川の流水の正常な機能の維持並びに水道用水及び工業用水の供給を行っています。
- ・琵琶湖の水位は、非洪水期にはB.S.L+0.3mを上限とする一方、洪水期にはあらかじめB.S.L -0.2m～-0.3mまで下げておき、洪水時の最高水位をできるだけ低くするようにしています。

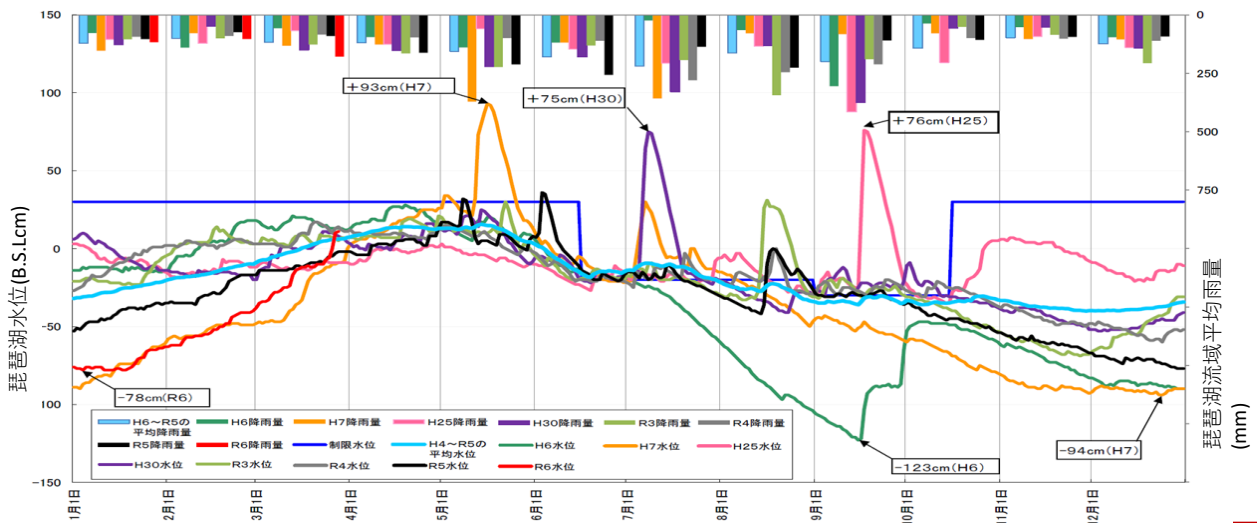


瀬田川洗堰操作室



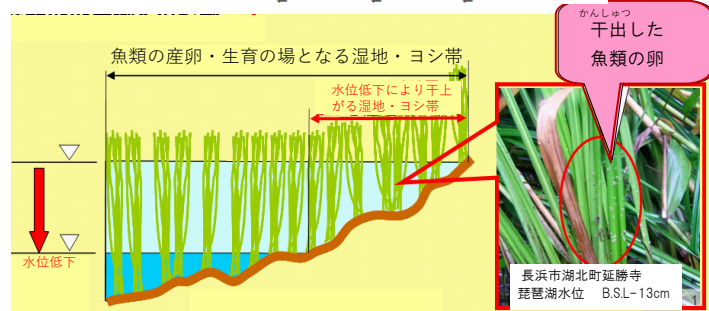
琵琶湖の水位管理図

琵琶湖主要年水位・降雨量変化図



環境に配慮した瀬田川洗堰の運用

- 魚類の産卵時期において、琵琶湖沿岸で産卵された後、ただちに水位を下げると、卵が干出(かんしゅつ)してしまう状況が起こることがわかりました。
- そのため、瀬田川洗堰操作規則に則った操作の中で、治水・利水に影響のない範囲で穏やかな水位操作に努めています。



水位低下による魚類への影響

水文調査・水質調査

- 琵琶湖の水位は、琵琶湖内5箇所の観測所(片山、彦根、大溝、堅田、三保ヶ崎)における朝6時の水位の平均値としています。
- 水位等の情報は、ホームページや各地に備えている河川情報板等でお知らせしています。
- 琵琶湖の水質は、滋賀県及び(独)水資源機構と連携し、北湖28地点、南湖19地点の計47地点で調査を実施しています。



令和5年度の琵琶湖水位低下と瀬田川洗堰操作

- 令和5年は9月以降の台風発生数が5個となり、統計開始以降最も少なくなりました。琵琶湖流域においても、8月の台風第7号以降まとまった雨が降らず、9月以降の降水量は平年を下回ったことから、琵琶湖水位は低下し続け、令和6年1月4日には-78cmと平成4年以降で6番目に低い水位を記録しました。
- この間、瀬田川洗堰では放流量が必要最小限となるようにきめ細かい操作を行い、琵琶湖水位の低下抑制に努めるとともに、懸垂幕や電光掲示板等により、琵琶湖の水を利用される方々に対して広く節水を呼びかけました。



懸垂幕による節水の呼びかけ



全閉の本堰(左)と必要最小限の水を下流に放流するパイパス水路(右)
(令和5年12月22日撮影)